ＤＶＤ鑑賞会 vol. 1
「心の専門家の真実　精神医学による恐怖時代」

もし医者が害を及ぼすなら、例えば治療ではなく拷問を与えたり、身体のケアをせずに魂を殺すような行為を犯すなら、その理由のひとつは、この社会が国家を通じてそうするようカネを払って依頼しているからです。

私たちはこの状況をナチス時代のドイツで目にし、そしてそういった多くの医者たちの首を吊るし上げました。 私たちはこの状況をソビエト連邦で目にし、そして義憤の念をもってそういった医者たちを非難してきました。しかし、このいわゆる「自由社会」において、同じ状況が起こっているということを、いつ私たちは気付くのでしょうか。私たちの中にいる医療犯罪者を、いつ私たちは認識し、公然と知られるようにするのでしょう。　精神医学名誉教授 トーマス･サズ博士

広範囲な調査と精神医学の専門家や犠牲者たちとのインタビューを基に描き出された、この衝撃的なドキュメンタリーは、精神医学の始まりから現在に至るまでの卑劣な歴史を明かしています。（市民の人権擁護の会のＨＰより）

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 2 「精神」

これまでタブーとされてきた精神科にカメラをいれ、
「こころの病」と向き合う人々がおりなす悲喜こもごもを、
モザイク一切なしで鮮烈に描いた日本初のドキュメンタリー！

釜山国際映画祭　最優秀ドキュメンタリー賞
ドバイ国際映画祭　最優秀ドキュメンタリー賞
マイアミ国際映画祭　審査員特別賞
香港国際映画祭　優秀ドキュメンタリー賞
ベルリン国際映画祭（09 年）、『選挙』に続き正式出品

撮影は、岡山県岡山市の「こらーる岡山診療所」を主な舞台として、2005 年の秋と、2007 年の夏に行われた。延べの撮影日数は 30 日程度。約 70 時間分の映像素材を得た。編集はニューヨークで行われ、約 10 ヶ月間を要した。

こらーる岡山は、岡山県岡山市にある外来の精神科診療所。現在も代表を務める山本昌知医師が中心になり、1997 年に設立された。当事者本位の医療がモットー。

監督は、ニューヨーク在住の映画作家・想田和弘（1970 年、栃木県足利市生まれ。東京大学文学部宗教学科卒。スクール・オブ・ビジュアルアーツ映画学科卒）。 前作『選挙』に続き、ナレーション・説明・音楽一切なしで、観客が自由に考え、解釈できる作品を完成。「被写体にモザイクをかけると、偏見やタブーをかえって助長する」と考え、素顔で映画に出てくれる患者のみにカメラを向け、人間として鮮烈に描き出すことに成功しました。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 3

「かけがえの前進」 Just a Life

「きーさん革命」の京都の当事者会「前進友の会」の
「えばっち（江端さん）」のドキュメンタリー

27 歳で精神病者となった江端一起は
拡声器と爆竹で「医療観察法案」に反対を叫ぶ。
心神喪失状態で重大な犯罪を犯した精神病者が
「危険でないとなぜ言える」と指摘する。

彼の生い立ちや患者会仲間との生活を通し、
他者性と共存する現代社会のあり方を問う。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 4

「カッコーの巣の上で」

1975年度アカデミー賞主要
5部門を独占した不朽の名作！

　オレゴン州立精神病院に、刑務所での強制労働を免れるため狂人を装う一人の男が入院してきた。そんな彼の目に映った病院の実情は刑務所をも凌ぐ凄惨なものだった。

　絶対権力者である婦長とそれに盲従する無気力な精神病患者たち。決して諦めることなく反抗し続ける彼の姿に患者たちは次第に人間の心を取り戻し始める…。

「薬に頼らない 精神病からの回復」
を実現している３つの映画です！

ＤＶＤ鑑賞会

「オープン・ダイアログ」 vol.5、6、15、20

「オープン・ダイアログ＝開かれた対話療法」は、フィンランドの西ラップランドで実践されている投薬を極力避け「対話」をおこなうアプローチ。５年後の追跡調査ではその地域で初回エピソード精神病をもつ人々の約８５パーセントが完全に回復し、大半の人たちが薬を止めていることが示された。

「その破れた翼でも」vol.7．17、23

元心理療法家であるダニエル・マックラー監督によるドキュメンタリー映画で、精神科の薬剤なしで人々か完全に統合失調症から回復しうることを示している。深刻な統合失調症から回復した二人の女性の人生を中心にしている。彼女らの統合失調症のルーツを子ども時代のトラウマに辿り、才能ある臨床家との成功した心理療法の詳細を追う。

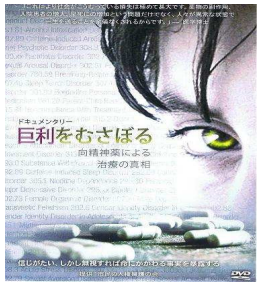
最初の女性はジョアン・グリーンバーグ（50 年以上完全に回復状態）、ベストセラー『バラの庭は約束しない』の作者である。二人目はキャサリン・ペニイ（30 年以上完全に回復状態）、カリフォルニアで精神科看護婦をしており、その治療の話はセラピスト、ダニエル・ドーマン医師によって著書『ダンテの治癒：狂気からの脱出』の中で語られる。
また、ピーター・ブレギン医師（『有毒な精神医療』著者）、ロバート・ワイテイカー（ジャーナリスト、『アメリカの狂気』『エピデミックの解剖学』著者、バートラム・カロン博士（『統合失調症の心理療法ー選択の治療』著者）らへのインタビュー、ニューヨーク市ワシントンスクエア公園でインタビューした 100 人を超える通行人の統合失調症についての見方がちりばめられている。

「癒しの家」 vol.8

スウェーデン・ヨーテボリのファミリー･ケア財団の仕事を追うドキュメンタリー映画。伝統的な精神科治療で上手く行かなかった人々をホスト･ファミリー（主にスウェーデンの田舎の農家の家庭）に預ける。ホストファミリーと暮らす人々は、機能している家族の一員となる。クライエントには集中的な心理療法、家族には集中的なスーパービジョンが財団により「無償で」提供される。複数の投薬が一生ものの精神科医療の時代に、精神病からの回復を薬なしで助けるプログラムである。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 9～12

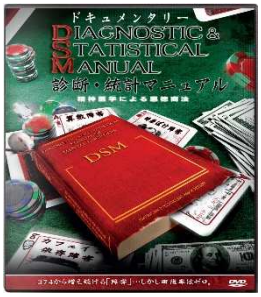
「巨利をむさぼる　向精神薬による治療の真相」



向精神薬。それは 3,300 億ドルもの巨額のカネを生み出しながら、何の治癒ももたらさない薬物 !?　これらの薬物を摂取していた人々のうち、毎年 42,000 人が死亡しており、その数は増加する一方・・・。

弁護士、精神保健の専門家、被害者の家族、被害者自身へのインタビューによって、偽りに覆い隠された精神薬の過剰投与の実態、社会に深く根づいたこの残虐なビジネスの真相を明るみに出します。

「DSM診断・統計マニュアル　精神医学によ悪徳商法」



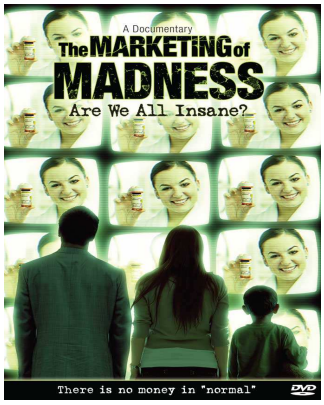
現在、人の心の状態を「診断」する根拠となっている DSM（DIAGNOSTIC　&STATISTICAL MANUAL）。しかし、科学的な裏づけはあるのでしょうか？　当の精神科医に問いただせば「そんなものはない」と認めることでしょう。が、この 60 年それが科学であると一般市民は信じ込まされてきました。正当な医学文献なのか、それとも科学を装った詐欺なのか、DVD をご覧になり、ご自身で確かめてください。

「軍事に介入する精神医学　隠れた敵」

40 年余り精神医学の人権侵害と闘ってきた、アメリカの市民の人権擁護の会（CCHR）提供の新作ドキュメンタリー。

軍隊、それは究極の実験場か。「戦争に配備された退役軍人の 37%以上が PTSD と診断され、その 80%が精神薬を投与されている。2009～12 年に自殺した兵士は、交通事故・心臓病・がん・殺人による死者よりも多い…」日本の自衛隊員の自殺率も高いとか…。対岸の火事ではないのかもしれません。

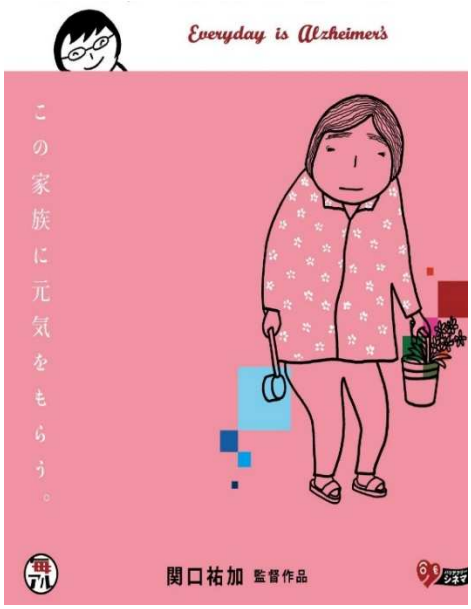
「心の病を売り込む　私たちはみな精神病なのか？」



同じく、CCHR の提供するドキュメンタリーです。精神医学と製薬会社との間には莫大な利益を生む癒着関係があり、向精神薬は年間８４０億ドルを稼ぎ出す一大産業になっています。その巧妙なマーケティング戦略の仕組みを明らかにします。１、はじめに　６分、２、製品開発　72 分、３、販売とマーケティング　54 分、４、その根底にあるもの　46 分と約３時間の長編なので、当日はセミナー用として、チャプターを抜粋したものを鑑賞します。全編をご覧になりたい方は、DVD を貸出しますので、お声掛けください。

ＤＶＤ鑑賞会 vol.13、14

「毎日がアルツハイマー」



YouTube で累計 50 万アクセスを集めた超人気動画がついに長編ドキュメンタリー映画として堂々完成！関口監督が認知症と診断された母と２年半にわたり向き合い、撮り続けた「長編動画」。29 年間離れて暮らした母と娘。母のアルツハイマーが娘を日本に呼び戻し、今までのギャップを埋めるかのように母と寄り添う。感情豊かな母との「毎日がアルツハイマー」な生活は、泣き、笑い、時にせつなく…、そしてまた笑う。現在進行形のせきぐち一家の「毎アル」な日々をご覧あれ。

ドキュメンタリーの最高傑作です。この映画は、日常の場面で認知症の人や家族が出くわす様々な出来事をユーモアいっぱいに描いています。この映画を観るだけで、教科書を何冊読んでも分からない認知症の世界が分かります。

遠藤英俊（ 国立長寿医療研究センター・内科総合診療部長）

「毎日がアルツハイマー2」

前作「毎日がアルツハイマー」の公開からまもなく２年。「毎アル」な母・ひろこさんの閉じこもり生活に少しずつ変化が現れます。デイ・サービスに通えるようになり、あんなに嫌がっていた洗髪をし、娘（＝関口監督）と一緒に外出もする。その姿は、なんとも幸せそうで“いい感じ”です。しかし、調子が悪い日は、感情の起伏が激しく、突然怒りがこみ上げたり、相変わらず一日中ベッドの上ということも。

そんな母との生活の中で、「パーソン・センタード・ケア（Ｐ．Ｃ．Ｃ．＝認知症の本人を尊重するケア）」という言葉に出合った関口監督は、自ら、認知症介護最先端のイギリスへ飛びます。認知症の人を中心に考え、その人柄、人生、心理状態を探り、一人ひとりに適切なケアを導き出す「Ｐ．Ｃ．Ｃ．」が教えてくれる認知症ケアにとって本当に大切なこととは。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 16

「川村先生が街で診療所を始めた　平成 26 年の春のべてる」

変わらないものと変わっていくもの。2014年の春の「べてる」スケッチ。北海道浦河町に「べてる」という当事者グループができたのは、1980年代中頃です。それからもう30年以上。いま「べてる」はある意味で変わりつつある・・・。有名になって、全国の注目を集め、若いメンバーが増え、そして、年寄りも増えました。
川村敏明先生が浦川赤十字病院を退職し、病院のすぐ前に「浦河ひがし町診療所」というクリニックを開きました。べてる創設当時からのメンバー早坂さんたちは、相変わらず、川村先生に診てもらっています。今回、早坂さんの診療場面を撮影することができました。これが実に面白い。医師と患者という関係がここまで熟してくると、名人芸のような場面が展開する。「早坂君は、俺たちが一生懸命、治そうとすると、すぐに具合が悪くなって入院するのに、具合が悪い時に〝商売〟してくると、すっかり治って帰ってくる」　川村先生のいう、「治せない医者、治さない医者」という言葉の真髄なのかと思います。（amazonの商品説明より）

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 18

「障害者権利条約と障害のある人の人権」

講演者：池原毅和（いけはらよしかず）　弁護士

1956 年 4 月生　東京都出身　東京アドヴォカシー法律事務所　所長

2015 年 1 月 23 日、社会福祉法人にいざ主催で行われた講演会の記録映像です。（埼玉県新座市　ふるさと新座館ホールにて）

障害者のいない社会も時代もないのに、障害者のことが考慮されずに社会は作られている。障害者が受け入れられる職場、障害者が暮らしやすい社会を作ることは、誰にとっても働きやすい、生きやすいことにつながるのに…。

2014年1月、障害者権利条約に日本も批准しました。条約や法律と聞くと、難しい、縁遠い話だと思われますが、大変にわかりやすく、また身近な問題として考えられるような講演会でした。また池原氏の温かい人柄が伝わる時間でもありました。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 19

Off Theater Film Festival ’79 一般公募部門入選作品

「養護学校はあかんねん！」

「養護学校はあかんねん！」は、1979 年の養護学校義務化の年の 1 月、文部省前に義務化を阻止しようと集まった障害者当事者を中心とする人たちの 6 日間の記録映画です。35 年前、彼らはすでに「差別の社会的障壁」と「インクルーシブ教育の必要性」を訴えています。

この運動があったからこそ今があるのだと、熱いものがこみ上げてきます。しかし、35 年たっても変わらない子どもたちを差別・選別する現実も突きつけられます。さらに、今の私たちにこれだけのエネルギーがあるのだろうかとも思います。（障害児を普通学校へ全国連絡会 HP より）

不自由な肉体を駆使し、反対を表明する姿には、だれしも目を瞠らずにはいられまい。中略　彼ら彼女らの示す発語への欲望の凄まじさには、もの言えぬ仲間のぶんも含まれているに違いない。しかも、肉体の不自由さを突き抜けて、言葉は理路整然と明晰であり、事態の本質を鋭くついている。明らかにそうしたあり方は障害者としての自覚と覚悟にもとづくと思われる。表現するものの姿を目に見え耳に聞こえる形で差し出すーその即物的な表現において、この映画は事件である。山根貞夫（映画評論家）

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 21

「退院支援、べてる式。」 監修:川村　敏明／向谷地　生良

退院支援は「質」より「量」！

「え、患者さんが良くなったら退院じゃないんだ」「うん、退院すると患者さんは良くなるんだって（笑）」――過疎・赤字・人手不足という過酷な環境のなかで、130床を60床に減らした浦河赤十字病院。「問題だらけ」だからこそできた逆説的ノウハウを一挙公開！ 事件は何も起こらないけれど、静かな感動を呼ぶ。 【DVDの内容】 Ⅰ　130床から60床へ　Ⅱ　浦河流退院プログラム　Ⅲ　退院支援は質より量　Ⅳ　37年ぶりの退院

DVD77分とテキスト120ページがセットになっており、DVDの一部、テキストの概要は、以下医学書院のHPで紹介されています。

http://www.igaku-shoin.co.jp/bookDetail.do?book=62853

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 22

「認知行動療法、べてる式。」

認知行動療法とは当事者みずからが困り事のメカニズムを理解し、「抜け道」を探すための“自助の道具”です。専門家は“自助の援助”をします。

認知行動療法では心の中を見つめません。世界との接点だけに着目します。「接点」とは次の二つです。入口=物事をどうとらえるか→認知、出口=物事にどう対処するか→行動。べてるの家では、そうした「認知」と「行動」にアプローチする方法として当事者研究とSSTをおこなっています。

240頁のテキストがセットになっていますが、DVDのみ鑑賞します。【DVD目次】　①「べてるの家」のSST　②服部洋子さんのセッションーSSTバラバラの会　③「べてるの家」の当事者研究　④ 沖田操さんのセッションーSSTこれデイーの会　⑤ 横浜市鶴見区での講演

DVDの一部、テキストの概要は、以下医学書院のHPで紹介されています。

http://www.igaku-shoin.co.jp/bookDetail.do?book=58442

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 24

NHK ハートネット TV シリーズ戦後 70 年 障害者と戦争（2015 年８月～９月 放映）

「ナチスから迫害された障害者たち」

第１回「20 万人の大虐殺はなぜ起きたのか」8/25 放映

ユダヤ人大虐殺の前に、いわば‘リハーサル’として、20 万人以上の障害のあるドイツ人らが殺害された…。日本の障害者運動をリードしてきた藤井克徳氏がドイツを訪ね、歴史を繰り返さないために何が必要かを考えます。

第２回「ある視覚障害者の抵抗」8/26 放映

ナチス政権下、ベルリン市内で作業所を経営していたオットー・ヴァイト。　自身も視覚に障害のあった彼は、当時迫害されていたユダヤ人や障害者たちを積極的に雇い、ナチスからかくまったといいます。今、私たちは彼から何を学べるのでしょうか。

第３回「命の選別を繰り返さないために」9/15 放映

５年前、ドイツ精神医学精神療法神経学会が長年の沈黙を破り、医師が患者殺害に関わったことを謝罪しました。なぜ障害者が殺されなければならなかったのか、なぜ本来命を救うべき医師が加担したのか。藤井氏がドイツの精神医学会の元会長を直撃。歴史家や障害当事者とも対話し掘り下げます。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 25

大阪には市民が精神科病棟へ訪問する「療養環境サポーター制度」があります。

DVD「大阪の精神科病棟への訪問活動より」

【内容】大阪の精神科病棟訪問活動の紹介、精神科病棟の療養環境がどのように改善されてきているのか （例 ナースステーション、病室、公衆電話、保護室、診察室、トイレ、意見箱、相談室）。　インタビュー：入院経験者「入院時つらかったこと」、大阪精神科病院協会会長「訪問活動を受け入れての感想」、大阪精神医療人権センター事務局長「訪問活動の意義」

DVD「入院経験から病棟訪問活動を語る」

【内容】入院体験のある２名の方へのインタビュー；入院時のこと ～つらかったこと、よかったこと 例）鉄格子つきの部屋、閉鎖処遇、長期入院、使役、服薬方法など。病棟訪問活動について～感じていること、やりがい。

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 26

「ひいらぎ と くぬぎ」

前半は、大正初期、少年がハンセン病(旧らい病)を発症し、当時の強制隔離時代の中、ハンセン病療養所「国立療養所多磨全生園」に収容され、多磨全生園で生き抜いていくという過去の様子の再現ドラマ。後半は、現在の多磨全生園での活動、園内に数多くある史跡や風景、そして「人権の森構想」についての紹介。

プロミンの効果が確認された 1940 年代前半あたりになると、国際的には、隔離そのものの要否が問題になっていました。ところが日本は、プロミンの効果をそれなりに認めながらも、再発して感染源になることを恐れて、隔離は依然として必要であるという認識をまげず、漫然と、かつ惰性的に、隔離状態を続けてしまいました。

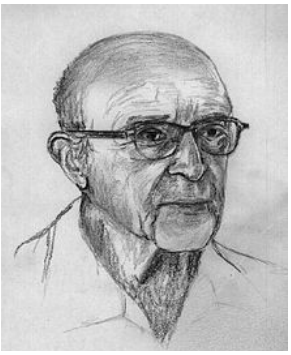
1995（平成 7）年、日本らい学会は総会の場において正式にこの過ちを謝罪しましたが、あまりにも遅すぎたのです。（国立ハンセン病資料館 HP より）　・・・ 精神科病院問題も似ている？！

「ひいらぎとくぬぎ」の DVD は、東村山市（図書館）または国立ハンセン病資料館で借りられます。貸し出し方法の詳細は、以下でご確認ください。

https://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/shisei/danjo/jinken/fukyuukeihatsu/kikaku20141106.html

ＤＶＤ鑑賞会 vol. 27

「出会いへの道－あるエンカウンター・グループの記録－」



カール・ロジャーズがファシリテーターとなって行った 16 時間のエンカウンター・グループの全記録を、4 人の参加者に焦点をあてて、正味 47 分にまとめたドキュメンタリー。1968 年の芸術科学部門アカデミー賞受賞作品“Journey into Self”の完全日本語版です。

ほんとうの自己と出会い、他人の真実にふれ、深い信頼の体験にめざめてゆく過程がリアルにえがかれ、現代社会における人間関係の問題を克服するためにつくられたエンカウンター・グループの一つの典型をみることができます。

カール・ロジャーズ（Carl Ransom Rogers，1902 年- 1987 年）は、アメリカ合衆国の臨床心理学者。来談者中心療法(Client-Centered Therapy)を創始した。1982 年、アメリカ心理学会による調査「20 世紀にもっとも影響の大きかった心理療法家」では第一位に選ばれた。学生時代に 1 度、その後も 2 度来日している。

DVD 貸出についての連絡先　090-9647-2149 （星丘）saitamaseikan@yahoo.co.jp